

魔法の言葉

岩手県一関市立大東中学校

二年 菅原彩華

私の母は小さい。身長一五〇センチあるかないか。いつも笑顔。とにかく明るい。隣にいてくれるだけで安心する。母がいるかいないかで、菅原家の雰囲気が変わる。小さくたって圧倒的な存在感の持ち主。

幼いころから何度も聞かされてきた言葉がある。「人には優しく。だって、相手が自分だったとき、その方が嬉しいでしょう?」

初めて聞いたのは、確か五歳くらいの時。幼かった私はあまり気にも留めなかった。というより、あまり、理解できていなかったのだと思う。「優しさは、相手も自分も温かい心にさせる。」ということをおかしてほしかったのだと母は言う。

曾祖母は老人ホームに長く入所していた。私や父が見舞うことはほとんどなかったが、母は毎週必ず訪問し、お世話をしていた。母に連れられて、私も何度か見舞ったことがある。耳の遠くなった曾祖母の耳元に顔を寄せて大きな声でゆっくり話しかける母。その時の曾祖母の嬉しそうな顔。入所している他のお年寄りに向ける母の優しいまなざし。地域の行事には率先して参加し、いつもできばきと働く背中や、地域の方々と楽しそうに語らう姿をいつもい

つも見てきた。外で見る母は、家の中で見る母と同じだった。

小学校六年生、私は毎日が楽しくて仕方がなかった。いつも笑顔の絶えない明るいクラスは自慢だった。それだけに、卒業が一日、また一日と近づくと、心は重くなっていった。このクラスがなくなってしまうことが嫌だった。中学生になりたくなかった。中学校に行けば、違う小学校の人たちも混ざる。今の楽しい日々が終わって、どこかに消える気がして悲しかった。

そんな頃だ。父が、附属中学校の受験を勧めてきた。きつと父は、少しでも私が良い大学や良い職に就けるようにと考えてくれていたのだと思う。父に認められているような気がして嬉しかった。でも、私は、決断できなかつた。違う中学校に行ったら、みんなと会えない時間がどんどん増えて、みんなの思い出さえも忘れてしまいそうで怖かった。クラスの中で、みんなの笑顔を見るのも辛かった。小学校卒業と中学受験との間で悩む日々が続いた。

一カ月もたつたころだろうか、母が突然、「無理しなくていいのよ。大丈夫だからね。」と言ってきた。そのたつた一言。一瞬にして、心が軽くなった。私は、考えすぎていたのだと思う。考えれば考えるほど結論が出なくて苦しかった。きつと私は、優しく安心して「大丈夫。」という言葉を待っていたのだと思った。

それからの日々はあつという間に過ぎていった。卒業までの一日一日を笑顔で過ごした。そして私は、この大東中学校に進んだ。

中学一年生。大好きなクラスの友達とは離れたけれど、不思議とそんなに寂しくなかった。むしろ、新しい友達を作ろうと張り切っていた。母の言葉が私の背中を押す。

「人には優しく。」「人には優しく。」

人に優しくするって、難しいことではなかった。何気ないちょっとした行動や気持ち。例えば、落ちていたものを拾ってあげたり、相談に乗ったり、友達の話最後まで隣で聞いてあげることなど。そう考えると、優しさってきりが無いんだと思った。すると、自然にみんなが話しかけてくれるようになった。

「優しくて頼りになるね。」

私は嬉しくて、たくさんクラスメートと接した。ほとんど、全員と言ってもいいくらい。一年前の悩みが嘘みたい。今、私には、頼もしくて信頼できる仲間がたくさんいる。

体育祭や文化祭で忙しかったとき、熱を出して体調を崩したとき、部活でうまくいかなかったとき。そのたびに私は、あの言葉を思い出した。「人に優しく。」すると、不思議なことに誰かに助けられ、いつのまにか解決していたりする。この言葉は困ったときに私を導いてくれる「魔法の言葉」なのだ。

私は、将来、社会福祉士になりたい。東日本震災で津波にあった岩手県では、普通の日常生活を送ることができない人がまだまだたくさんいる。高齢化社会は進む一方だ。児童虐待、貧困化、格差社会…。差し出される手を求めている人はたくさんいる。そんな困っている人に寄り添い、解決する手助けをしたい。私の一つ一つの言葉や行動で誰かを幸せにしてあげられたら、そんなすてきなことはない。母は、いつもあの言葉とともに私のすぐ近くで支えてくれていた。母の生き方が私の道しるべだ。母から私へ渡された「優しさのバトン」が、次から次へとつながり、思いやりあふれる未来になるよう、その未来を作る一員として歩んでいきたいと思う。